

書懷

篠原國幹

雨有<sup>あめあり</sup>烟有<sup>けむりあり</sup>又<sup>また</sup>雲有<sup>くもあり</sup>

四百<sup>しひやく</sup>余州<sup>よしゅう</sup>乱<sup>みだ</sup>れて紛<sup>ふん</sup>紛<sup>ふん</sup>

腰間<sup>ようかん</sup>の秋水<sup>しゅうすい</sup>今<sup>いま</sup>方<sup>まさ</sup>に試<sup>こころ</sup>みん

妖邪<sup>ようじゃ</sup>を掃<sup>そう</sup>了<sup>りょう</sup>して国君<sup>こっくん</sup>に謁<sup>えつ</sup>せん

【作者】篠原国幹（一八三七〜一八七七）（天保七年〜明治十年）は日本の武士（薩摩藩士）・陸軍軍人である。薩摩国鹿兒島城下加治屋

町で篠原善兵衛の子として生まれる。諱（名）は国幹、通称は藤十郎、冬一郎という。少年時代に藩校・造士館に入って和漢学を修め、ついで藩校の句読師となり、長じてからも和漢の典籍を読むことを好んだ。剣術をはじめ薬丸兼義に薬丸自顕流を、次いで和田源太兵衛に常陸流を学ぶ。江戸に出て練兵館で神道無念流を学んだ。また馬術・鎗術・弓術も極め、文武両道を兼ねていた。一八六二年（文久二年）、有馬新七らと挙兵討幕を企てたが、島津久光の鎮圧にあつて失敗した（寺田屋騒動）。薩英戦争で砲台守備に出陣。戊辰戦争のとき、薩摩藩の城下三番小隊の隊長となつて鳥羽・伏見の戦いに参戦し、その後、東征軍に従つて江戸に上つた。上野の彰義隊を攻めたときは、正面の黒門口攻めを担当し、その陣頭に立つての指揮ぶりの勇猛さで世に知られた。この後、奥羽へ転戦した。

【通釈】雨が降り霧も出て、さらに雲があるかの如く、あちこちで反政府の戦いが起き、入り乱れて収まりがつかなくなっている。いま

まさに、鍛え上げられた日本刀のようなくもり一つない兵を率い、東上して君側の奸を取り除き、天皇に拝謁して、われらの赤心を知っていただくのだ。